

Emiri Miyamoto
宮本笑里
ヴァイオリニスト



Profile プロフィール

14歳でドイツ学生音楽コンクールデュッセルドルフ第1位入賞。今ももっとも注目されるヴァイオリニストの一人。コンサート活動のほか、TV番組『THE 世界遺産』などのメインテーマ曲演奏やニュース番組のキャスターなどに活動の場を広げている。父は元世界的なオーボエ奏者で、現在は指揮者、東京音楽大学教授としても活躍する宮本文昭さん。

ヴァイオリニストとして生きていく決心

7歳のとき、近所の音楽教室で初めてヴァイオリンを手にし、音を出した瞬間、とても楽しかったんです。そのとき感じた楽しさは、現在までずっと続いています。小学校時代は週1回レッスンに通い、自分の好きな曲をマイペースで弾いているという程度でした。

ところが中学生になると、父から、ヴァイオリンをやめるか、猛練習をしてコンクールに挑むか、決断を迫られました。中途半端な気持ちで続けるのは良くないというのが父の考えでした。やめることなく考えられず、本気で練習を重ね、14歳のとき「ドイツ学生音楽コンクールデュッセルドルフ」で年代別第1位を受賞。これがプロになるきっかけにもなり、父にはとても感謝しています。

受賞を機に、学生時代は勉強と食事以外はヴァイオリンの練習という生活に変えました。とくに大学時代は友人と遊ぶのも簡単ではないほどで、1日16時間は練習をしていました。

音楽家の「師匠」から父親へ
親子の距離がぐっと接近

私が小さい頃、父はケルン放送交響楽団のオーボエ奏者として活動していました。日本とドイツを往復する忙しい日々でしたが、時間をつくっては旅行に連れていかれる優しい存在でした。けれども、中学からは、とても厳しい演奏家の「師匠」としての存在の方が大きくなりました。音楽に関わる話しかできなくなり、寂しいという気持ちもありました。

オーボエ奏者を引退した後も、何事にも真剣で妥協しない父は、音楽家として尊敬する存在です。また最近、演奏家の師弟という関係ではなくなったことで、親子としての距離が近くなったように思えます。父との親子コンサートなどを定期的に行ううち、昔はつくれなかった親子の時間を取り戻しているような感じがしますね。気軽に話せるようになり、お気に入りのお店や流行りの健康食品や家電製品についてなど、話題も広がりました。

演奏活動を通じて
被災地を支援していきたい

リーなどを贈りましたが、お菓子を添えた手紙が意外に喜ばれた思い出があります。今年3月に、東日本大震災で大きな影響を受けた仙台フィルハーモニー管弦楽団との共演アルバム「renaissance(ルネッサンス)」をリリースしました。共演のお話は以前からありましたが、震災後に開いた私のリサイタルにも駆けつけてくださったなど交流が進み、今回の共演に至りました。被災された方々が笑顔になるようにとの希望を込めて1曲1曲作った、とても感慨深いアルバムです。

また昨年は、テレビ番組のキャスターとしても何度か石巻市を訪れました。5月に初めて被災者の方々の前で演奏したときは、深刻な状況を目の当たりにし、「ここで弾いていいのだろうか」と複雑な気持ちでしたが、皆さんと一緒に手拍子をしてくださって、本当に胸がいっぱいになりました。さまざまなたちと想いを共有することができ、私の中に、音楽の世界につながる新たな命が吹き込まれた気がしました。

私にとってヴァイオリンは
もっとも大切な存在

休日にはなるべく外出し、美術館や公園を散策します。7歳までと中学の3年間はドイツの自然豊かな環境で育ったせいですが、緑を眺めていると心が落ち着くんです。また最近は一入旅にもはまっています。箱根

クラシック音楽をもっと身近にしたい、
ヴァイオリンを通して喜びを届けていきたい。

ヴァイオリンを弾くことは、本業としてだけでなく、一番の趣味でもあるという宮本笑里さん。音楽家の先輩でもあるお父様とのエピソードから震災被災地での演奏体験まで幅広く語っていただきました。



お父様の宮本文昭さん Photo:有田周平

姉を含めた家族4人の誕生日や父の日、母の日には、みんなと一緒に食事をしてプレゼントを交換します。これまで父には、靴下など日常で使えるものやアクセサ

Always Keep!

肌身はなさず

「本番前のエコカイロ」

本番前は、緊張で手が冷たくなってしまふので、たとえ夏でも欠かせません。直前まで握って暖めることで、普段の指先のやわらかさを保てます。以前は使い捨てカイロを使っていたのですが、ここ2年くらいは本番前の心強いアイテムとして、この充電式カイロを使っています。「持っていれば大丈夫」という気持ちになる、お守りみたいな存在です。



楠田枝里子さん

Eniko Yumoto

司会者・エッセイスト



Profile プロフィール

三重県伊勢市出身。東京理科大学理学部卒業。日本テレビのアナウンサーを経て、現在フリー。テレビ番組の司会や、ノンフィクション、エッセイ、絵本など、幅広い創作活動を続けている。主な出演番組は「なるほど!ザ・ワールド」「世界まる見え!テレビ特捜部」など。著書は「ナスカ砂の王国」「ピナ・バウシュ中毒」ほか多数。

抑えきれない好奇心が私の原動力

私は、これまで一度も観光を目的に旅をしたことがないんです。一年の半分以上、日本にいない生活を送った時期もありましたが、それはすべて、自分の中に「これが見たい、知りたい、聞きたい」という興味を満たす旅、自分の疑問を解き明かす旅なんです。そんな気持ちでむくむく大きく湧き上がって、矢も楯もたまらず出かける旅がほとんどですね。

初めての「一人旅」もそうでした。実家の近くに小さな川が流れていて、「危ないから橋の向こうに行つてはだめ」と聞かされていたんですが、そう言われると行きたくなくなるのが子ども心。ある日、一人で行って、橋を渡り、向こう側まで行ってみたんです。何を見たかは覚えていないのですが、私が満足して帰ってきたら、近所中が大騒ぎになっていた記憶があります。

あのとき、私を橋の向こうまで行かせたのも「あの道の先にあるのは何だろう」という好奇心でした。

あふれる好奇心を大切にしながら、人生を、旅を、楽しんでいます。

海外の国々を題材にしたテレビ番組の司会を長く務めてきた楠田枝里子さん。世界を駆け巡る旅のお話を中心に、その動機にもなっているあふれる好奇心について、いきいきと語っていただきました。

偶然のきっかけから一生涯のテーマが生まれた

私の場合、好奇心や疑問が旅の動機になるので、仕事で行く以外は一人旅です。ナスカの地上絵の研究で知られるマリ・ア・ライヘをベルーのナスカに訪ねたのは、砂漠に佇む彼女の写真を目にし、「誰なの、何をしているの?」と思ったのが最初でした。彼女について調べ続けて10年後の1985年、会いたい気持ちで募つて飛び立ち、砂漠に3週間とどまつて話を聞きました。その後も通い続け、彼女が亡くなった今も、何度もナスカを訪ねています。また、彼女が育つたドレスデンの街も見たくなり、その当時チェルノブイリ原発の事故直後だったこともあり、緊迫した社会主義体制下の東ドイツで取材するという貴重な体験もしました。

旅に出かける前の準備も楽しい

旅は出かける前から始まっているんですね。だから、旅の準備ももっと楽しみ方があると思うんです。私の場合は、飛行機のフライトスケジュールからホテルやレストランの手配まで、すべて自分でやります。旅先に思いを巡らしながら行うこの楽しみを、人に譲るのはもったいない。例えばホテルは3つくらいの候補にFAXで質問を送ります。「この街に行きたいので、英語の話せる運転手をつけて車を手配できますか」とかね。返事の内容でサービスの質もおよそ分かりますし、手書きの文字の丁寧さなども選択する際の情報になります。

いつも、何かに向かって

好奇心を満たすためには健康も大切。実は、私、これまで病気をしたことがないんです。母が栄養学の講師を務めていて、小さい私が晩ご飯に何か残すと、朝から食べたものを挙げて、「タンパク質からビタミンA、B1、B2まですべて摂れているけれど、Cが20%足りない。だから、

Always Keep!

肌身はなさず

「思い出の記念写真」



1998年10月、ピナ・バウシュのヴァーヴパルター市芸術監督25周年を祝して開催されたお祭りのときの記念写真。いつも身近に置いて大切にしています。中央がピナで、左が世界的なバレエダンサーで振付家のウィリアム・フォーサイス。深夜2時から3時頃だったと思いますが、レストランでお願いして撮っていただいた、私の貴重な宝物です。